東京都スポーツ振興審議会（第２８期第３回）

日　時：令和５年３月２９日（水）午後２時２９分

会　場：　東京都庁第一本庁舎北側４２階　特別会議室Ａ※オンライン併用

午後２時29分開会

○稲垣スポーツ総合推進部企画調整担当部長　それでは、ただいまから第28期第３回東京都スポーツ振興審議会を開会いたします。

本日は、大変お忙しいところ、ご出席をいただきまして、ありがとうございます。私は、生活文化スポーツ局企画調整担当部長の稲垣でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

議事に入りますまで、私が進行を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

本日13名の委員の皆様にご出席をいただいておりますので、審議会に関する条例第７条第１項に基づく開催に必要な定足数を満たしておりますことをご報告申し上げます。

本日の委員の皆様のご出席状況につきましては、お手元の委員名簿に記載してございますのでご覧ください。

また、前回の審議会から委員の交代がございました。ご紹介をさせていただきます。

まず、延與桂委員でございます。

○延與委員　よろしくお願いいたします。

○稲垣スポーツ総合推進部企画調整担当部長　鈴木純委員でございます。

○鈴木委員　よろしくお願いします。

○稲垣スポーツ総合推進部企画調整担当部長　幸本智彦委員でございます。本日は所用によりまして、ご欠席となってございます。

それでは、まず初めに、生活文化スポーツ局長の横山より一言ご挨拶を申し上げます。

○横山生活文化スポーツ局長　生活文化スポーツ局長の横山と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

委員の皆様方には、年度末のお忙しい時期にもかかわらず、第28期の第３回東京都スポーツ振興審議会にご出席を賜りまして、誠にありがとうございます。

会議に先立ちまして、一言ご挨拶を申し上げます。

コロナ禍で、制限を余儀なくされていたスポーツでございますけれども、徐々に回復の兆しも見えてまいりまして、今月５日に行われました東京マラソンでは、従前と同じ約３万8,000人のランナーの方々が、この東京の都心を駆け抜けました。

また、フルスタジアムで開催されたＷＢＣでの侍ジャパンの活躍など、スポーツの持つ力を感じられる機会が増えてきていると感じております。

１年の延期を経て開催されました東京2020大会でございますが、新規恒久施設の整備やボランティアの活躍など、多くのレガシーを残しましたが、今後控えております国際スポーツ大会に向けましては、都民、国民の信頼を得ていくということが何より重要と考えております。このため、東京都といたしましては、今後の国際スポーツ大会がガバナンスの確立されたものとなりますよう、都の関与の在り方をガイドラインとして取りまとめをいたしました。

また、世界陸上やデフリンピックが開催されます2025年に向けました未来の東京の姿を、ビジョン2025として公表いたしておりまして、「全ての人が輝くインクルーシブな街・東京」の実現に向けて取り組んでまいります。

さて、平成30年に策定をいたしました東京都スポーツ推進総合計画は、令和６年度までの計画となってございまして、取組の総括と今後に向けた検討に着手する時期となってまいりました。本日は、審議事項のほか、都民のスポーツ活動に関する調査結果を踏まえた今後のスポーツ振興について、具体的な方策など、忌憚のないご意見を頂戴いたしたいと考えております。

限られた時間の中ではございますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

○稲垣スポーツ総合推進部企画調整担当部長　次に、資料のご案内をさせていただきます。

本日、議事で使用いたします資料は、お集まりの皆様には、お手元のタブレット端末に、オンラインでご参加の皆様には画面上に映してご説明を申し上げます。

タブレット端末につきましては、画面をタッチいただきますと、右上に同期、非同期のボタンが表示されてございます。現在は同期の状態となってございまして、説明者の説明に合わせまして、画面が自動的に切り替わるようになってございます。非同期を選択いたしますと、説明者の説明とは別に、ご自身の操作で適宜資料をご覧いただくことが可能でございます。

その際、右下に表示される「発表する」、「退席する」のボタンには触れないでいただければと存じます。

資料をご覧いただいた後は同期状態に戻していただきますよう、お願いいたします。

横長の資料につきましては、タブレットを横向きにしていただきますと資料を大きくご覧いただけます。そのほか、操作につきましてご不明点がございましたら、お近くの係員にお声がけをいただければと存じます。

オンライン参加の委員の皆様につきましては、事務局で資料を映しますので、ご覧い

ただければと存じます。

なお、お集まりの委員の皆様の机上には、次第、東京都スポーツ振興審議会第28期委員名簿、座席表をお配りさせていただいてございますので、適宜ご覧いただければと存じます。

また、本年度行いました都民のスポーツ活動に関する実態調査及び障害者のスポーツに関する意識調査の報告書も併せて机上配付してございますので、適宜ご参照いただければと存じます。こちらの冊子につきましては、よろしければお持ち帰りいただければと存じます。

資料のご案内は以上でございます。

また、本日の進め方でございますが、まずは本会の副会長につきまして、ご選任をいただきました後、次第に記載してございますように、審議事項１件と報告事項５件、最後に意見交換という順番で進めてまいりたいと存じます。

審議事項は、令和５年度スポーツ団体（社会教育関係団体）補助金・分担金事業（案）についてでございます。

審議が終了いたしましたら報告事項に移らせていただきます。

その後、意見交換といたしまして、都民のスポーツ活動に関する調査結果を踏まえた今後のスポーツ振興について、皆様からご意見を頂戴したいと存じます。

それでは、恐縮ですが、ここから松尾会長に進行をお願いいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

○松尾会長　皆さん、改めましてこんにちは。年度末、大変お忙しい中にお集まりをいただきましてありがとうございます。また、オンラインでのご参加の皆様方、本当に今日はありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。

先ほど、局長のお話もありましたけれども、東京マラソンで３万8,000人の方が走っていただいた、そしてＷＢＣのお話がありましたけれども、事実は小説より奇なりとよく言いますが、むしろ、事実は小説どおりだったというんでしょうか、夢どおりだったというか、叶ってくれて大変ありがたいなと思うと同時に、やはりスポーツというのは大きな力がもしかしたらあるなというのを改めて感じたところでございました。

都民の皆様方が、本当に健やかに豊かにスポーツライフを楽しんでいただけるようにするにはどうすればいいのか、今日も委員の皆様方から忌憚のないご意見をお聞かせい

ただければありがたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、次第に沿って議事を進めさせていただきたいと思います。

本審議会は公開で行っておりますので、報道機関や傍聴の方々は、会議の円滑な進行にご協力をお願いしたいと思います。

まず初めに、副会長の選任についてですが、白石委員が昨年８月にご退任なさったために、現在副会長が不在という形になっております。そのため、東京都スポーツ振興審議会条例第５条第２項の規程に従いまして、委員の皆様に互選をいただくことになってございます。

それで、私の提案でございますけれども、長きにわたりましてスポーツ行政に携わってこられ、そして現在は東京都の障害者スポーツ協会の会長としてご活躍されている延與委員が副会長にふさわしいのではないかというふうに思いますが、いかがでございましょうか。

（異議なしの声）

○松尾会長　ありがとうございます。それでは副会長に、延與委員をお願いしたいと思います。

延與委員、副会長席のほうにご移動いただければと思います。よろしくお願いします。

それでは、続きまして審議事項に入りたいと思います。審議事項の令和５年度スポーツ団体、これは社会教育団体、教育関係団体もそうなのですけれども、補助金・分担金事業（案）について、事務局から説明をしていただきます。

本件は、スポーツ基本法第35条によりまして、社会教育関係団体に対し補助金を交付しようとする場合に、審議会の意見を聞くこととされております。

なお、本審議会には、補助金・分担金の対象となる団体からも委員としてご出席いただいております。このような場合、国の審議会では、該当する団体に関連する委員は審議に参加できないようにしています。本審議会でも公平性を担保するために、国の審議会の例に倣い、該当する団体に関連する委員におかれましては、ご発言をご遠慮いただきたいと思います。

これについて委員の皆様からご意見等がなければ、このまま進めさせていただきますが、よろしゅうございますか。

（異議なしの声）

○松尾会長　はい、ありがとうございます。

では、延與副会長におかれましては、公益社団法人東京都障害者スポーツ協会の会長をお務めでいらっしゃいますので、ご発言はご遠慮願いたいと思います。同様に、中嶋委員におかれましては、公益財団法人東京都体育協会、一般社団法人東京都レクリエーション協会の、また、岡田委員におかれましては、一般社団法人東京都スポーツ推進委員協議会のそれぞれ役員をお務めでいらっしゃいますので、ご発言はご遠慮願います。

それでは、事務局から説明をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

○菅原スポーツ総合推進部調整担当課長　それでは、事務局より令和５年度スポーツ団体（社会教育関係団体等）補助金・分担金事業（案）のスポーツ関係について、ご説明いたします。

初めに、東京都体育協会でございます。令和５年度は12億2,300万円余りを計上しております。主な事業といたしまして、二つ目のシニアスポーツ振興事業や、七つ目の競技力向上事業等を引き続き実施するほか、四つ目の地域スポーツクラブ中間支援組織事業補助などが、東京都スポーツ文化事業団から移管され、新たに実施ということになります。

次に、東京都スポーツ文化事業団でございますが、17億5,000万円余りを計上しております。主な事業といたしまして、三つ目のスポーツ東京案内や、六つ目の都立特別支援学校活用促進事業等を引き続き実施するほか、七つ目のデフリンピック開催支援や、10番目の都立スポーツ施設の連携促進事業などを新たに実施いたします。

続いて、東京都障害者スポーツ協会でございますが、７億6,000万円余りを計上しております。主な事業といたしまして、一つ目のパラスポーツ地域サポート事業や、三つ目のパラスポーツ人材の活動活性化事業等を引き続き実施するほか、七つ目の東京パラアスリート強化事業につきましては、支援対象を拡充して実施いたします。

次に、１ページ進みまして、東京マラソン財団でございますが、３億4,100万円余りを計上しております。主な事業といたしまして、一つ目の東京マラソンや、三つ目の東京レガシーハーフマラソンの開催補助等を引き続き実施するほか、四つ目の参加型スポーツイベントの開催におきましては、ランニング普及事業を新たに実施いたします。

以降の東京都レクリエーション協会、東京都スポーツ推進委員協議会及び東京都市町村体育協会連合会につきましては、今年度と同額を計上しておりまして、引き続き記載の各事業を実施いたします。

最後に、競技団体等につきましては、45億300万円余りを計上しております。主な事

業といたしまして、一つ目の国際大会の誘致・開催支援や、二つ目のデフスポーツ競技団体都内活動促進事業を実施するほか、五つ目のＧＲＡＮＤ　ＣＹＣＬＥ　ＴＯＫＹＯの推進では、臨海部、多摩部において、自転車イベントやロードレース等を実施してまいります。

以上、広く社会教育に資する都民参加型のスポーツイベントや、子供自転車教室といった事業が増えてきていることも踏まえまして、幅広にご審議いただきたく存じます。よろしくお願い申し上げます。

○松尾会長　はい、ありがとうございました。

それでは、今度は資料１－２も続けて、ご説明をお願いします。

○大村体育健康教育担当主任指導主事　はい、それでは学校体育関係についてご説明をさせていただきます。

資料１－２をご覧ください。

東京都教育委員会では、資料にございますとおり、東京都高等学校体育連盟、東京都中学校体育連盟、東京都特別支援学校・特別支援学級設置学校体育連盟などの団体に対する分担金を計上しております。

この分担金は、各団体主催の総合体育大会の運営において、会場費、役員費、競技用品費として使用されております。

令和５年度の予算につきましては、２団体が増額、１団体が減額となっております。

まず、増額した団体についてになります。日本中学校体育連盟、関東高等学校体育連盟が、東京開催、大会実施種目の規模に応じまして、40万円から700万円増となっております。

続いて、減額した団体についてです。関東中学校体育連盟が40万円減となっております。これは、令和５年度は、関東中学校体育連盟主催の大会の種目が減った関係で減額となっております。

私からの説明は以上になります。

○松尾会長　はい、ありがとうございました。

審議事項につきまして、ご質問、ご意見がございましたら、ご発言をお願いしたいと思います。

ご発言に当たりましては、本日、会議室にお集まりいただいている方におきましては、挙手をいただいて、私がお名前をお呼びいたしましたら、目の前のマイクの右側のボタ

ンを押して、マイクをオンにしてからお話をいただければと思います。ご発言後は、もう一度同じボタンを押していただきますとマイクがオフになるということになってございます。

また、オンラインでご参加の委員におかれましては、挙手ボタンを押していただいた上で、私がお名前をお呼びしました後にお話しいただければと思います。

では、いかがでしょう。今のご提案に対しまして、どなたかご発言のある方はいらっしゃいますでしょうか。

○原委員　青山学院の原でございます。１点ご質問させてください。

私はスポーツの中でも駅伝、マラソンが専門なのですけども、都道府県対抗の種目には、数多くの種目があるかと思いますけれども、私のその専門の駅伝、全国都道府県男子駅伝、女子駅伝というものがあるのですけども、是非とも東京都に勝っていただきたいというような強い思いがあるわけなのですが、ちなみにその強化に当たっての強化費というのはどの分野に該当して、どの程度の費用が計上されているのか、ちょっと確認させてください。

○松尾会長　はい、では、事務局のほうでご回答いただけますか。お願いします。

○菅原スポーツ総合推進部調整担当課長　はい、それでは事務局より回答させていただきます。今、原委員からのご質問の件につきまして、東京都のほうで競技力向上事業というのが該当いたしまして、資料１－１、東京都体育協会に対する共催負担金として、下から三つ目ですね、競技力向上事業があります。

そのほか、パフォーマンスサポート事業も、従来、コンディションサポート事業として、スポーツ文化事業団で実施していたものになりますけれども、こちらも東京都体育協会に今年度から事業を移管いたしまして、選手に対して医・科学に基づいたサポート事業などを実施するといったものが主な事業にございます。

○松尾会長　いかがでしょうか。

○原委員　是非結果を出していただきたいなというところで、期待しております。

○松尾会長　はい、ありがとうございました。

ほか、委員の皆様で、いかがでございましょうか。

○上代委員　すみません、一つ質問をさせてください。

部活動の地域移行が入ってくると思うのですけれども、その予算というのはどちらのほうになっているのでしょうか。

○松尾会長　どうぞ、お答えください。

○大村体育健康教育担当主任指導主事　地域移行に関しましては、先日、教育庁のホームページのほうで地域連携、地域移行についての推進計画を策定させてもらったところです。国の事業等も活用しながら、予算についてはそちらのほうに示させてもらっております。

○上代委員　この中には特にないということですか。

○大村体育健康教育担当主任指導主事　そうですね、この中には含まれておりません。

○上代委員　はい、ありがとうございます。

○松尾会長　はい、ありがとうございます。

ほか、いかがでございましょうか。

どうぞ、お願いします。オンラインでご参加いただきありがとうございます。

○宮地委員　早稲田大学の宮地でございます。

原案に異論はないですが、意見を申し述べたいと思います。

障害者スポーツに対する増額も考慮されていて、妥当な予算案だと思います。今年度、相応にご対応いただいたわけですけれども、この流れを一層大事にしていただいて、支援を要する多様な人たちがスポーツ活動に一層参加できるような、それを東京都が国に先駆けてどんどんリーダーシップを取っていくのだ、ということを示せるような予算案を今後引き続き作っていただければと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

○松尾会長　貴重なご意見、ありがとうございます。

何かコメントはありますか。事務局のほうから、よろしゅうございますか。ありがとうございました。

ほか、いかがでございましょうか。

（なしの声）

○松尾会長　はい、ありがとうございます。

それでは、本件につきまして、審議会としては補助金の交付に問題なしとさせていただければと思います。いかがでございましょうか。

（異議なしの声）

○松尾会長　ありがとうございました。

それでは、次に、事務局より報告事項の説明をお願いいたします、

○稲垣スポーツ総合推進部企画調整担当部長　報告事項につきましては、時間の限りもございますので、（１）から（５）まで続けてご説明をさせていただきます。

それでは（１）からお願いいたします。

○菅原スポーツ総合推進部調整担当課長　ではまず、事務局より令和５年度予算案（概要）についてご報告いたします。

令和５年度予算の総額ですけれども、網かけ部分の一番下にございますとおり、238億1,100万円余りで、令和４年度と比較いたしますと、７億6,200万円余りの増となっております。

次のページ、Ⅱ、主要事業をご覧ください。

まず、１から６がスポーツの振興に該当いたしまして、１、生涯スポーツ・地域スポーツの振興や、２、スポーツムーブメントの創出、３、競技スポーツの振興等の事業を実施してまいります。

次に、７、パラスポーツの振興では、環境整備のほか、理解促進、普及啓発、競技力向上事業等を実施してまいります。

８、国際スポーツ事業の推進では、デフリンピック開催に向けた取組や、世界陸上、デフリンピックを契機とした機運醸成、U-15女子ソフトボールワールドカップの開催支援、臨海部、多摩部での自転車イベントやロードレース等を実施してまいります。

最後に９と10、体育施設等の運営、整備では、都立スポーツ施設の指定管理や改修工事等に必要な経費を計上しております。

予算案の説明は以上でございます。

○巻口スポーツ総合推進部企画調整課長　続きまして、令和５年度の生活文化スポーツ局の組織体制についてご報告いたします。資料右側の令和５年度の欄をご覧ください。

令和５年度の組織体制でございますが、多摩地域での自転車ロードレースの開催や、女子ソフトボールワールドカップ、世界陸上、デフリンピックの開催支援など、国際的なスポーツ大会等に関する事業を推進するため、現在のスポーツ総合推進部の国際大会課を発展的に解消しまして、新たに国際スポーツ事業部を新設いたします。

また、その次に記載のスポーツ施設部におきましては、都立18施設の管理、戦略的活用、整備等を一体的に推進するために、経営企画課及び施設整備課の２課体制に再編いたします。

このように体制を拡充いたしまして、来年度もしっかりスポーツ施策に取り組んでま

いりたいと考えております。

簡単でございますが、令和５年度の組織体制については以上でございます。

○長野スポーツ総合推進部国際連携担当課長　それでは続きまして、先月２月に公表いたしました「ビジョン2025 スポーツが広げる新しいフィールド」についてご説明を申し上げます。

初めに、ビジョンを策定した趣旨でございますが、2025年に世界陸上、それからデフリンピックが東京で開催されます。こうした国際大会の開催は、感動や希望を人々に届け、人々のつながりを生み出すといった大きな価値をもたらすものでございます。このため、現行のスポーツ推進総合計画に位置づけるスポーツ振興の範囲にとどまらず、これらの大会を通じて、都市のプレゼンス向上や、にぎわいの創出など、都が目指す2025年とその先の東京の未来の姿を新たにビジョンとして取りまとめました。このビジョンに記載する取組を通じまして、「全ての人が輝くインクルーシブな街・東京」の実現に貢献してまいりたいと考えてございます。

このビジョンでは、基本的な方針といたしまして、五つの柱を設定し、取組の方向性を例示いたしました。それぞれの柱につきまして、スライドをめくりながら簡単にご説明をさせていただきます。

一つ目の柱は、「みんなが つながる」と題して、ユニバーサルコミュニケーションの促進を目指すために、デジタル技術の活用や、情報保障の充実などに取り組んでまいります。

二つ目の柱、「世界の人々が 出会う」では、文化プログラムの展開や、東京の食、観光の発信などを進めてまいります。

三つ目柱、「こどもたちが 夢をみる」として、競技観戦やエスコートキッズ、アスリートの学校訪問、こういったものを進めてまいります。

四つ目の柱、「未来へ つなぐ」ですが、多様性の尊重や環境への配慮、こういったものを進めてまいります。

最後五つ目の柱、「みんなで 創る」では、多様な視点での大会づくり、障害のある方、あるいはボランティアの方々の参画を進めてまいります。

今後、関係者と連携をしながら、取組の具体化を進めてまいります。審議会の委員の皆様のご助言も引き続きお願い申し上げます。

説明は以上です。

○齋藤スポーツ総合推進部事業推進担当課長　続きまして、「国際スポーツ大会への東京都の関与のガイドライン」について説明させていただきます。今後の国際スポーツ大会における大会運営組織が公正で信頼されるよう、都は法律等の専門家から成る有識者会議を設置いたしました。有識者からの助言を反映したガイドラインを昨年末に策定いたしました。

適用対象でございますが、資料上段に記載の要件を満たすもののうち、ガイドラインの目的、実現に向けて、東京都と大会運営組織が認識を一致した大会でございます。

次に、大会運営組織の取組と都の関与についてでございます。大会運営組織は、始動期からガバナンス確立に向けた体制整備、本格活動期にはガバナンスの実効性確保、東京の発展及び都民の参画に係る取組を行い、都は大会運営組織の主体的な取組の具体化に向けた助言・連携・サポート等を行います。

大会運営組織の始動期から本格活動期にかかる取組を体系的に整理し、組織設立当初から適切なガバナンスを確保することを盛り込んでいる点が本ガイドラインの特徴でございます。

続いて、大会運営組織のガバナンス確立に向けた体制整備についてでございます。役員等の適切な選任、コンプライアンスの確保、内部統制・外部チェック、利益相反の管理、情報公開の観点から、それぞれ考え方と具体的な取組の例を示してございます。

本ガイドラインは、2025年に東京での開催が予定されている世界陸上とデフリンピックの準備、運営体制の構築に向けて、各大会の特性等を踏まえつつ活用してまいります。

また、国の大規模な国際、または国内大会の組織委員会等のガバナンス体制等の在り方、検討プロジェクトチームの検討状況等も参考にいたしまして、ガイドラインは必要に応じて精査してまいります。

次ページ以降にガイドライン本文をお付けしておりますので、後ほどご覧いただければと思います。

説明は以上でございます。

○武田スポーツ施設部施設整備第一課長　続きまして、東京2020大会を契機に整備した六つの新規恒久施設と、大会のレガシーを生かし、整備する二つの施設につきまして、現状を報告いたします。

まず、夢の島公園アーチェリー場です。令和３年10月の再開業以降、アーチェリーの各種大会のほか、フライングディスクやファッションショーをはじめとしたイベントな

ど、様々な目的でご利用いただいております。

次に、海の森水上競技場ですが、昨年４月の再開業以降、ボート、カヌーをはじめとする水上スポーツのほか、景観や陸域を生かしまして、ユニークベニューとして様々なフェスティバルやロケ地として利用、そして、今後開園する海の森公園と連携したイベントなどでの活用が進められております。

次に、大井ホッケー場ですが、昨年６月の再開業以降、ホッケーをはじめとする各種競技での利用のほか、地元の品川区や大田区と連携した事業も行われております。

次に、カヌー・スラロームセンターですが、昨年４月の再開業以降、カヌー・スラロームの競技利用が進められております。なお、来月からはスポーツ庁からナショナルトレーニングセンター競技別強化拠点施設の指定を受けまして、運営を開始する予定となっております。また、ラフティングなどの水上レジャーや、水難救助訓練、ロケ地としても活用されております。

有明アリーナでは、昨年８月の再開業以降、東京2020パラリンピック１周年記念イベントが開催され、バスケットボールやボッチャなど、様々なスポーツで利用されております。また、各種コンサート等、エンターテインメントでの活用も進んでおります。

次に、来月再開業いたします東京アクアティクスセンターです。水泳の各種競技大会が開催されるほか、こども体育教室など、施設を活用した様々な事業が展開される予定でございます。

最後に、東京2020大会のレガシーを生かし、整備する施設でございます。

まず、東京都パラスポーツトレーニングセンターにつきましては、３月21日に開業し、オープニングセレモニーを実施いたしました。今後、パラスポーツの競技力向上の拠点とするとともに、障害のある人もない人もパラスポーツに親しめる場とすることで、パラスポーツの普及、振興に努めてまいります。

また、有明アーバンスポーツパークでは、今夏にスケートボード施設の暫定利用を開始いたします。大会レガシーゾーンの先行開業につきましては、令和６年３月を予定しております。

今後、全ての施設が出そろい、都立スポーツ施設は18施設になります。それぞれの特性を生かした幅広い活用を進め、都民の皆様に多様な価値を提供できるよう取り組んでまいります。

以上、簡単ですが、報告事項となります。

○井上スポーツ施設部施設調整担当課長　それでは続きまして、東京辰巳アイスアリーナ（仮称）施設運営計画の概要についてご報告いたします。

本施設につきましては、当審議会でのご意見等を踏まえ、昨年11月に施設運営計画を公表いたしました。

施設の概要ですが、メインリンクとサブリンクの２面からなる通年アイスリンク施設とし、フィギュアスケート、アイスホッケー、カーリングなど、６競技の利用を想定しております。

本施設は、早朝、深夜も予約営業を行い、年間約28万人の延べ利用者数を想定しており、指定管理者制度による管理運営を行い、年間運営費は約1.54億円と試算をしております。現施設の構造、設備をできる限り活用し、アイスリンク施設を整備することとしており、整備費として約59.3億円、その他に大型映像装置等の導入に約9.1億円の整備費を見込んでおります。

今後のスケジュールですが、本年４月に改修工事を開始し、令和７年秋頃に開業を予定しております。

説明は以上となります。

○富山スポーツ総合推進部競技担当課長　続きまして、東京都スポーツ推進総合計画における2024年度に向けたパラスポーツ競技力向上の目標設定について、ご報告させていただきます。

東京2020大会に向けて、大会に出場するパラアスリート数を25人として目標設定をしていたところです。計画終了の2024年度に向けて、成果を踏まえて検討するとしていたことから、新たな目標として、都が発掘・育成・強化したアスリートで、新たなJPC（日本パラリンピック委員会）の強化指定選手・次世代育成選手数とさせていただきまして、資料中央の図に記載していますけれども、その人数を75人とさせていただきました。

75人の設定根拠なのですけれども、今年度2024年度の実績人数として現時点で21人がJPC強化指定選手として既に認定されているところでございます。この人数を基準に、毎年25人以上の強化認定を目指し、2024年度までの３年間の合計で新たに75人の強化認定を目指すことを目標にしております。

資料中央の図になりますけれども、東京ゆかりのアスリートを育成していくための三つのステージを図示したもので、アスリート育成のパスウェイ的なものを表しておりま

す。

まず、１番の競技機会の拡大につきまして、競技スポーツを始めよう、アスリートを目指してみようという方を対象に、競技体験会を開催するとともに、パラスポーツの情報を専用Ｗｅｂサイトで分かりやすく発信するなど、多様なパラスポーツの普及に努めていきます。

次に２番、アスリートの育成・団体支援ですが、競技スポーツを始めた方を競技団体につなげるとともに、団体が実施する強化合宿等の経費支援や、団体組織の基盤を強化するなど、パラスポーツ振興において、競技団体が主体的な役割を果たせるよう、後押ししてまいります。

３番、アスリート強化・スタッフ支援の取組でございますが、トップを目指すアスリートとして育成された選手や、支えるスタッフの活動費を助成し、東京ゆかりのアスリートが国際舞台で活躍できるよう、積極的に支援してまいります。さらに、東京ゆかりのパラアスリート人材などを学校や地域につなぎ、アスリートの経験や知識を、講演会等を通じて地域に還元してまいります。

このような取組を通じまして、図で示したようなアスリート育成のサイクルを回していきまして、今後とも、より多くの東京ゆかりのアスリートが、日本代表候補となるよう取り組むことで、競技スポーツの裾野を拡大し、パラスポーツを通じた共生社会の実現を目指してまいりたいと考えております。

説明は以上になります。

○八重樫スポーツ総合推進部事業調整担当課長　続きまして、障害者のスポーツ施設利用促進マニュアルについてのご報告です。

このマニュアルは、障害のある人の施設利用に際し、施設管理者等が配慮すべき点をまとめており、工事を伴うようなハード改修ではなく、簡易な備品購入や、ソフト対応などの好事例等を紹介しております。

今年度、東京2020大会や、障害者差別解消法の改正等を契機に進められた新たな事例を収集し、障害当事者や有識者等からなる検討委員会の審議を経て、改訂いたします。

改訂版の全体構成は右ページのとおりです。これまで同様、障害種別ごとのコミュニケーションのポイント、場面ごとの配慮のポイントや、施設での取組を、事例などを更新して紹介したほか、第１章、第６章から第８章を新たに追加いたしました。

次のページをご覧ください。主な改訂内容をご紹介いたします。

まず、ページ左側ですが、第１章、東京2020大会のレガシーでは、大会競技会場の整備に当たって、当事者の意見を聴取した取組、大会をきっかけに施設で始めたパラスポーツ普及の取組等を掲載します。

次に、ページ右側ですが、第５章、スポーツ施設の利用では、車いす利用者等の受入れを促進するため、床を傷つけない工夫として、これまでのスポーツ用車いすの正しい理解のための項目に加え、適切な維持管理方法を追加いたします。

第７章、障害者差別解消法では、合理的配慮の提供における対話の重要性、スポーツ施設での取組事例を紹介いたします。

次のページです。来年度はこのマニュアルを広く普及し、身近な地域での積極的な取組を後押しするため、希望する区市町村スポーツ施設にアドバイザーを派遣、助言等を行います。また、区市町村スポーツ施設や、民間スポーツ施設に改訂したマニュアルを配布するとともに、研修を実施してまいります。

あわせて、利用場面ごとの対応方法を分かりやすく伝えるための動画も公表してまいります。

これらの取組を通じて、障害のある方の身近な地域のスポーツ施設の利用を促進してまいります。

ご報告は以上です。

○稲垣スポーツ総合推進部企画調整担当部長　報告事項は以上でございます。

○松尾会長　はい、ありがとうございました。非常に分かりやすくご説明をいただきましてありがとうございました。

○稲垣スポーツ総合推進部企画調整担当部長　会長、申し訳ございません。大変恐縮ではございますが、こちらで局長が急遽公務の都合によりまして、退席をさせていただきたく存じます。申し訳ございません。

○松尾会長　どうもありがとうございました。

では、続けさせていただきますね。ありがとうございました。

今、ご報告をいただいたところでございますけれども、これにつきまして、委員の皆様方からご質問等々があれば、今、承りたいと思いますけれども、多岐にわたりますからあれですけれども、いかがでございましょうか。

じゃあ、白戸委員、お願いします。

○白戸委員　これ、質問じゃなくて意見でもよろしいですか。

○松尾会長　結構です。どうぞ。

○白戸委員　都議会議員の白戸でございます。

今、報告いただいた中で、新規恒久施設、これは私も仕事の、都議会議員のほうで、今、様々やっているところなのですが、一つ思っていたのが、やはり恒常的にもう少し開かれた施設にしていくということが非常に大事で、まだまだ限られた人しか使っていないというのが一つ大きな問題点だというのは、先日もちょっとお話をしたところなのですけども、それともう一つ、一つのアイデアとして、インターハイ等々を誘致する。今、インターハイとかは比較的固定した場所でやるのですね。簡単に言うと野球の甲子園です。

そこから着想を得て、例えば、全ては海の森で、高校生による大会は、あそこが頂点なのだというようなイメージになると、普段の練習も、それから大会も海の森を使うようになりますよね。そういうふうに、ここのカヌー・スラロームセンターもそうなのですけども、何か象徴的なものを持ってきて、高校生のアーチェリーの憧れは夢の島なんだとか、高校生のスラローム、カヌーはここなのだというような、何かインターハイの誘致みたいな、これはちょっと高体連さんとの話になってくるとは思いますけども、そういう新しい何かを持ってくると、一般の方を取りあえず取っていこう、読めない数字を見るというのも、これももちろん大事なことですし、都民に向けて開いていくということも大事なのですけども、何か固定客といいますか、競技の象徴的な場所にしてしまうというのは一ついいアイデアではないかなというふうに思っております。

以上です。

○松尾会長　貴重な意見、ありがとうございました。

それでは、今、オンラインでご参加いただいている方から手を挙げていただいております。ゼッターランド委員、よろしくお願いします。先にお願いします。

○ヨーコ・ゼッターランド委員　はい、ありがとうございます。先ほど施設利用の、施設の使用状況ですね、その件に関してちょっとお伺いしたいのですけれども、例えばカヌーとかですと、羽根田選手、羽根田卓也杯とか、そういうのが実施されているというのがありましたけれども、例えばほかの競技、あるいはその競技が使用する頻度の高い会場で、こういったオリンピアン、メダリストの方の名前を冠した大会は、ほかにも結構実施されていたりするのでしょうか。質問です。

○松尾会長　はい、ありがとうございます。

いかがでございましょうか。

○武田スポーツ施設部施設整備第一課長　お答えさせていただきます。オリンピアンの方の冠をつけた大会というのは代表的なところで申し上げたところではあるのですけども、ほかは、今のところそういったものは、新規恒久施設でいうとなかったと思いますので、そういったところを競技団体の方とも連携したそういった大会が今後開けるように取り組んでいきたいというふうに思っております。

○松尾会長　はい、ありがとうございます。

ゼッターランド委員、いかがでございましょう。

○ヨーコ・ゼッターランド委員　はい、ありがとうございます。やはり、せっかくといいますか、メダリストの方であったり、あるいはその競技で本当にパイオニアの方ですよね、そういった方たちのもう一つやっぱりその名前が残っていく、それも一つのつながっていくということだと思うので、ご協力いただける、例えばアスリートであったりとか、そういう方たちの協力も得ながら、子供たちにとっても、この場所に来れば、こういうロールモデルの人が活躍していたのだという、世代を超えてのつながりというのですかね。それがやっぱりそういう場所にあって、そこで開催されるというのは、すごく良いのではないかなと思うのですね。やはり、活躍された選手がせっかく色々なその強化支援を得て、そこまで達していると思うので、一つの還元方法として、そういうことも考えているのではないかと思うのですね。やっぱり長くその名前が残っていくということでは、一つ、その競技のベースができて、つながっていくと思いますので、そういった働きかけなどもできるのではないかなと思いました。

以上です。

○松尾会長　はい、ありがとうございます。先ほどの白戸委員もそうですけれども、いわゆるシンボリックな場所にしていく、あるいはシンボリックな人に活躍をいただいて、皆さんに周知を図りながら活用いただくというようなこともあるのではないかというご意見かと思いますね。ありがとうございました。

じゃあ、藤田委員、お願いします。

○藤田委員　藤田です。よろしくお願いします。私は障害者のスポーツ施設利用促進マニュアルについて、意見というか、是非お願いなのですけども、障害のある方が、一般のスポーツ施設を使うときに、やはり元々利用されている障害のない方の理解が進まないと、非常に使いにくいところがあると思うのですね。意図していないにしても、心ない

声が聞こえてしまうと、やっぱりここは私は使えないわというようなことになってしまいますので、今回のマニュアルの中には、そういう形ではない形で入っているということだったと思うのですが、しっかりと利用者の方、障害のない方の理解を促進させていくということを、次回改定されるときには是非入れていただきたいなと思います。

以上です。

○松尾会長　はい、ありがとうございました。

何かコメントはございますか。よろしいですか。はい、ありがとうございました。

それでは、宮地委員、お願いします。

○宮地委員　失礼します。よろしくお願いします。二つあります。

一つは、コンプライアンスのガイドラインのご説明をいただきました。このガイドラインをいつから適用されていくのかについて、お聞かせいただければと思います。

二つ目は、障害者スポーツの話がありました。障害者という表現の中で、東京都の資料を見ますと、「害」の漢字が使われています。「害」の字に漢字を使うのか、あるいは違った表現を使うのかは多く議論されていて、国の法律では何も定まっていませんし、国の方針も決まっていないのですけれども、東京都としては、障害者の「害」の字について、どのように使っていこうと思われているのか、この２件について、教えていただければと思います。

○松尾会長　はい、ありがとうございます。

それでは１件目のガバナンスについてのお話、コンプライアンスのお話がありましたけど、いつからこれは適用なさるのですかということについてお願いします。

○齋藤スポーツ総合推進部事業推進担当課長　ご説明させていただきます。こちらのガイドラインについては、12月の末に施行をさせていただいております。世界陸上ですとか、デフリンピックの準備をそれぞれの関係者において進められておりますけれども、その辺のところでこちらのガイドラインは適用をしていきたいと考えているところでございます。

○松尾会長　はい、ありがとうございます。

それでは２点目の障害者の表記についてお願いします。

○八重樫スポーツ総合推進部事業調整担当課長　はい、ご質問ありがとうございます。

ちょっと全庁的にというところは分からないところがあるのですけれども、スポーツの中でということになりますが、法令等における表記が障害者という漢字で「害」の字

を使っているので、そちらに従って使用しているところです。

○松尾会長　はい、ありがとうございます。

宮地委員、いかがでございましょうか。

○宮地委員　はい、答弁、ありがとうございました。

そのとおりで仕方がないと思うのですが、多くの道府県では、既に平仮名に変えている道府県も幾つかあります。東京都はどうなのだろうということを調べてみましたら、東京都は基本的に考えていないというわけじゃないけども、意見を出していません。こういうことをしっかり議論していって、全庁的にはまだ変わらないかもしれないけれども、スポーツの分野から何か新しい議論をしていく、そういうことを進めて、社会を変えていく力をスポーツが発揮するという取組の仕方もあろうと思いますので、是非機会がありましたら、この漢字の使い方についても、ご検討いただければと思います。よろしくお願いいたします。

○松尾会長　はい、ありがとうございます。大変貴重なご意見をいただきましてありがとうございました。

それでは、まだご質問はあろうかと思いますけれども、今から意見交換のところに入りますので、そのときにまた触れていただく、あるいはご指摘いただければと思いますので、よろしくお願いします。

それでは、ここからは意見交換に移りたいと思います。

意見交換では、都民のスポーツ活動に関する調査結果を踏まえた今後のスポーツ振興について、皆様からご意見をいただければと思います。

意見交換に先立ちまして、事務局から説明をさせていただきますけれども、内容が非常に多岐にわたるものでございますし、またボリュームが非常にあるものですから、都民のスポーツ活動に関する実態調査と、障害者のスポーツに関する意識調査の二つのパートに区切って進めさせていただければというふうに思います。

では、最初に都民のスポーツ活動に関する実態調査から説明をお願いできればと思います。よろしくお願いします。

○星スポーツ総合推進部企画調整担当課長　それでは資料３をご覧ください。

本日、委員の皆様にご意見をいただく時間を十分確保しますため、要点のみご説明することを予めご了承いただければと思います。

まず意見交換の説明に入る前に、都のスポーツ施策の全体像や、今後のスケジュール

についてご説明いたします。

都のスポーツ施策の全体像ですが、現在の都のスポーツ推進計画では、「する」「みる」「支える」の三つの視点からそれぞれ政策指針を掲げておりまして、それにひもづく形で指標の達成に向けて各事業を行っているところでございます。来年度も既存事業の拡充や、新規事業の実施等によりまして、この指標の達成に向けて、取り組んでまいりたいと思っております。

次に、今後のスケジュールについてですが、今回及び来年度の審議会におきまして、皆様から意見を頂戴し、現在のスポーツ施策の課題や、今後に向けた論点の洗い出しを行いたいと考えております。

それらを踏まえまして、第29期、次の期の審議会におきまして、次期計画の検討を本格化させてまいります。それに当たり、来年度は計画検討に必要となる基礎的な情報について調査を行う予定でございます。その基礎調査についてですが、資料に記載の主な調査項目について、情報収集、あるいは分析などを行う予定でおります。調査の内容につきましては、本日の審議会でのご議論も踏まえまして、ブラッシュアップをしていきたいと考えてございます。

それでは、ここからご意見を頂戴したい内容について説明いたします。

テーマは二つありまして、都民のスポーツを「する」「みる」、そして障害者のスポーツを「する」の観点からそれぞれご意見をいただければと思います。

では、まず都民のスポーツ活動に関する実態調査にかかる今年度の結果を簡単にご説明いたします。

都民のスポーツ実施率ですが、今年度は65.9％と、60％台後半を維持しているものの、諸外国の数字と比較いたしますと、より一層の向上が必要な状況であると言えます。棒グラフの右側、状況を年代別に見ますと、20代から40代が61.6％と、50代以上と比較し、やや低くなっている状況でございます。

次に、コロナ前である2018年の結果と、運動種目を比較いたしますと、ウオーキングや散歩、体操といった誰でも身近で気軽に始められるものが上昇してございます。

また、実施した場所につきまして、こちらも道路や遊歩道、広場や公園、自宅など、身近な場所で取り組む方が多いことが伺えます。

一方、スポーツをしなかった理由については、「仕事や家事が忙しくて時間がない」が、昨年に続いて50％を超えているほか、「面倒」、「機会がない」、「身近に場所が

ない」といった回答が多い状況でございます。

スポーツをしなかった理由について、特に20代から40代に着目しますと、「仕事や家事が忙しくて時間がない」が、全世代平均に比べて、高くなっております。また、その忙しさゆえに、スポーツが面倒と感じる方もいると推察されまして、気軽にスポーツに触れられる機会づくりが必要と言えます。

さらに棒グラフの一番右側、20代におきましては、スポーツ・運動が好きではないと回答した方も多くおり、子供も含め、若い世代へのアプローチが重要になってまいります。子供のスポーツに関連しましては、公立中学校等におけます部活動の地域連携等の方針が国によって示されておりまして、都におきましても、地域の実態に応じた地域連携等が進むよう、区市町村への支援などを行っていくこととしております。

以上の状況を踏まえまして、来年度の都の取組になりますが、区市町村が行う施設改修等を支援するスポーツ空間バージョンアップ補助事業や、ビジネスパーソン向けにスポーツのきっかけを提供するアーバン・フィットネス推進事業、気軽に取り組める運動動画を作成しまして、運動意欲を喚起するだれでもフィットネス推進事業、また、環境に優しく健康にもよい、自転車をさらに身近なものとする取組であるＧＲＡＮＤ　ＣＹＣＬＥ　ＴＯＫＹＯを臨海部、そして多摩地域で実施するなど、様々な事業を行ってまいります。

続けて、「みる」スポーツの状況ですが、この１年間にスポーツを直接観戦した都民の割合は35.4％と昨年に比べますと回復傾向にはあるものの、下の棒グラフのとおり、目標である50％には全年代において届いておらず、全体の底上げが必要な状況であると言えます。

実際にスポーツを観戦した方は、うち半数以上の方が次回も観戦したいと感じておりまして、まずは会場に足を運んでもらうことが重要と考えております。また、運動意欲の向上や、グッズの購入などにも寄与しており、観戦の機を逃さずに「する」、あるいは応援をはじめとした「支える」につなげていく取組というものが重要かと考えております。

どうすればスポーツ観戦が促進されるかについて確認いたしますと、行きやすい場所、あるいは入りやすい雰囲気など、観戦のハードルを下げることや、入場料が無料、あるいは他のイベントとの同時開催など、柔軟な観戦のきっかけづくりというものが求められております。

令和５年度の取組ですが、地域のプロチームと連携し、観戦の招待をすることや、東京マラソンをはじめとした様々なスポーツ大会の機会を捉え、観戦機会の確保につなげてまいりたいと思っております。

以上、駆け足で説明をしてまいりましたが、意見交換の論点として、「する」「みる」それぞれの視点でまとめております。

まず、「する」の論点ですが、子供も含め40代以下の若い世代を中心に、未実施者層に対しまして継続的にスポーツに取り組んでもらうため、今後どのような場所や機会を提供し、関心を喚起していくか、さらに発展的な視点として、個人の健康促進にとどまらず、人とのつながりですとか、ダイバーシティといったような、社会課題の解決へ、どのように貢献をしていくかについてご意見を頂戴したいと考えております。

次に、「みる」の論点ですけれども、どのように会場に足を運ぶきっかけをつくっていくか、さらに発展的な視点として、「みる」から「する」、「支える」へどのようにつなげていくか、また、スポーツ観戦を通じて、地域の活性化、あるいは観光資源化など、どのようにシナジー効果を発揮していくのかについてご意見を頂戴したいと考えてございます。

説明は以上となります。

まずは、「する」の論点から忌憚のないご意見を頂戴できればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○松尾会長　ありがとうございました。

それでは、今ご説明をいただきましたけれども、少し論点を絞りながら、皆様方のご意見を頂戴できればというふうに考えます。

本日は非常に内容も多く、時間も限られておるものですから、それぞれのパートごとに、いろいろ皆さんそれぞれのご専門でいらっしゃいますし、もちろんスポーツ全般には、非常に全てにおいてご存じでいらっしゃいますけれども、少し絞りながら、パートごとに私のほうで最初にご指名をさせていただいて、ご発言をいただければというふうに思います。

時間も限られているものですから、お一人、３分から４分ぐらいのところでおまとめをいただけると大変ありがたいと思います。よろしくお願いします。

それで、まずは子供も含めまして、40歳代以下の世代の未実施者層の方に継続的にスポーツに取り組んでもらうために、今後どのような場所、機会、あるいは興味、関心を

持っていただいて、それでやってみようかなと思ってもらい、そしてやってみたら継続してみようかなというような、そういう論点から、皆さん方にお話をいただければというふうに思うところでございます。

まず、最初に、中嶋委員、スポーツ推進振興事業を実施する体育協会としての幅広い視点でのご意見をいただければありがたいと思います。よろしくお願いします。

○中嶋委員　ありがとうございます。都体協の中嶋でございます。

先ほどの調査結果の中で、しない理由ということで、育児や家事が忙しいということですとか、あとは面倒くさいというのがかなり目立っていたと思うのですね。ですから、裏返せば、例えば親子で楽しめるスポーツですとか、面倒くさくないスポーツというようなものも、やっぱりスポーツ実施率を高める大きなツールじゃないかなと思うのですね。そういうことを考えますと、私、レクリエーション協会も所管しておりますが、いわゆるスポーツレクリエーションというのは本当に手軽に、また着替えなくてもいいような、そういうスポーツですので、是非そういったものを広めていくというのも一つの手段かなと思っています。

都のレクリエーション協会は、種目ごとに大小合わせて70ぐらいの団体があるのですね。ですから70種目ぐらいあるということなのですが、会長もご案内のように、こういったレクリエーション協会の団体というのは、かなり会員が高齢化していまして、新規の会員をどう増やしていくのかが非常に課題になっていますので、そういう意味ではこういった団体のほうにいろんな場所や機会を提供して、都民、国民の皆さんに気軽に楽しんでもらうという場を提供してもらうのが一つ考えられるのではないかなと思います。

それとやはり身近な場所で、例えば近くの公園でキャッチボールやサッカーをしたいといっても、今、非常に禁止されていますので、非常に不自由ですよね。あと、ウオーキングやランニングをしたいといっても、かなり道路が規制されていて、なかなかうまくできないということになりますと、もちろんスポーツの所管は生活文化スポーツ局なのですが、いろんな行政分野をまたがった政策になると思うのですね。ですから、そういった意味では、このスポーツ実施率を高めるということは重要な行政課題であるというコンセンサス、これがやっぱり必要じゃないかなと思います。

参考になるかどうかあれですけれども、2012年のロンドンオリンピック、これはスポーツ振興で、招致をするという大目的があるのですけれども、もう一つの大きな目的として、東ロンドン地区の再開発、これの起爆剤とするというような話は有名な話ですね。

もう一つ、私、ロンドンでレガシー開発公社の方に直接お聞きしたことがあるのですが、もう一つ大きな課題がありまして、当時のそのイギリスの国民というのは、非常にメタボが多くて、医療費が非常に増大していたと。ですから、国民がスポーツを盛んにすることによって、医療費を下げて、行政課題を解決しようというような裏の大きな目的もあったと聞いています。ですから、やっぱりスポーツを実施することによって都政にどういうプラスの効果、特に都民生活がどう向上するのかというのを具体的に掘り下げながら、それを皆の共通認識として、都政課題として情報共有していくということがやっぱり重要ではないかなと思います。

それと最後に、都体協の立場として二つお願いといいますか、ご意見させていただきたいと思うのですけれども、やはりこういったスポーツ、身近なスポーツを実際に担っている現場というのは、地域のスポーツ団体が多いです。地区ごとに体育協会がございますし、総合型の地域クラブというのが都内にも約150ございます。ただ、その団体のほとんど全てがボランティアでやっているのですね。ですから、かなり財政的に基盤が弱いということになっています。今回、東京都のほうで競技団体の組織基盤強化事業というのを新たにつけていただきましたけれども、今後、そういった地域のスポーツ団体に対する支援の強化も是非お願いしたいと考えています。

それともう一つ、国民体育大会ですが、今回、栃木の国体でしたけれども、５年ぶりに男女が天皇杯、皇后杯を獲得して東京が総合優勝したのですね。これは非常な快挙ですばらしいことなのですが、なかなかニュースにならないと。他県ですと、優勝しますとものすごい地域で盛り上がるらしいのですが、どうしても東京では盛り上がらないということで、今回は、知事に表敬訪問をさせていただいたり、そういったアナウンスもしたのですが、是非今後は、東京勢、頑張っていますので、こういったモチベーションを高めて、さらに東京勢の評価をしていくためにも、国体のアピールというものも、是非今後考えていただければなと考えております。

長くなりました。以上でございます。

○松尾会長　ありがとうございました。多角的な角度からご意見をいただきまして、本当にありがとうございます。特に着替えなくてよいスポーツって今まであっただろうかというのはありますよね。やっぱり着替えなければならないし、汗をかくものであるというような固定観念がどうしてもスポーツを遠ざけてしまう要因になっている可能性もありますよね、お得意ではない方については特に。そういった意味で、着替えないで済む

スポーツというのは一つのキーワードになる可能性がございますね。本当にありがとうございます。

それでは、次に、白戸委員からご発言をいただければと思います。特にご自身も選手でいらっしゃったわけですけれども、スポーツを見に来てもらうための工夫等々も含めてご意見いただければと思います。よろしくお願いします。

○白戸委員　はい、ありがとうございます。白戸でございます。

端的にスポーツをしてもらうというところでいくと、三つぐらいポイントが、僕は今日あるかなと思っています。

一番分かりやすいところで言うと、まず施設の使い方ですよね。日本の施設、スポーツ施設もそうです、プールや公園もそうなのですけども、とにかく「Don't」が多い。これはやるな、あれはやるなと、もう本当に外国人の選手が来て、施設を使ったときに、何で日本はこんなに「Don't」ばっかりなのだと驚くのですが、やっぱりルール、それから時間、そういったものももう少しカジュアルに、ちょっと行ってちょっと遊べるぐらいの感じにしないと、なかなか予約して、何時から何時で、こういうものを使ってと言われると、やっぱりすごいハードルになってしまうのではないかという感じがします。なので、ちょっとこの施設の使い方のハードルをどうやって下げるか。時間、ルール、あとは、例えばさっきちらっとお話が出ました子供ですよね。海外なんかでは、もう赤ちゃんを連れてきて、横にぱっとバシネットを広げて、赤ちゃんを横に寝かして、横でお母さんはプールを泳いでいるみたいなことが普通にあるのですよ。日本でもちろんそれがすぐできるかどうかは別ですけども、何かそういった子供を連れてきてもぱっとスポーツができてしまうような、これは周りの環境もあると思うのですけど、ちょっとそういった雰囲気づくりみたいなものも一つ大事かなという感じがしています。

あともう一つ、２番目は、僕は黒船だと思っています。今回、日本人ってやっぱり海外の人に対する憧れが強いのですけども、やっぱりすばらしかったなと思うのは今回の東京マラソン。外国の方が１万2,000人走られまして、街の雰囲気が変わりました。明らかに現場にいらっしゃった方、皆さんそう思ったと思うのですが、選手はまず外国人が多い。それから観客に外国人が多い。その前後の日程も全部外国人が、もう皇居の周りは海外みたいでした。あの雰囲気って、みんなやっぱり、日本人が見たときに憧れ、素敵なのですよ。別に海外の方が素晴らしいって言っているわけじゃないのですけども、日本人はやっぱりそういった楽しくスポーツをやっている、ちょっとスポーツを楽しく

できるような人たちが周りでやってくれると、そうだよね、こんな感じなのだと常識、概念が変わっていくと思うのです。そういった意味では、今回東京マラソンをああいう形でやれたのは、僕は東京都にとってすごく大きかったと思いますし、今後も是非この参加型のスポーツ、それもできれば都民の参加はもちろん、国際的にいろんな方々が参加する、ＧＲＡＮＤ　ＣＹＣＬＥ　ＴＯＫＹＯなんて、それの一つになってくると思いますけども、そういった国際的な参加スポーツをやはり東京都なんかでやっていくことが、非常に街を変えていくキーになっていくのではないかなと思っています。ロンドンなんかはもうマラソンとサイクリングイベントですごくその街が変わったと聞いていますので、この辺りは一つ参考になるのかなと思っています。

最後、もう一つだけ。マッチングです。コロナ禍でやっぱり、今はどちらかというと一人で、外で「する」スポーツ、活動というのがすごく盛んになったのですが、反面、やはり今、人がすごく出会いを求めているというか、会う機会がない。特に今一番少なかった20代、30代という若年層は、皆さんご存じのように結婚に至る一番の出会いの機会がマッチングアプリなのですね。今はもうそういう時代になってしまっている、残念ながら。残念なのかどうか分かりませんけども。僕らは残念かと思いますけども。そんな中で、スポーツの機会を通して人と人が出会う機会、コロナ禍の逆です。リアルに人が出会う機会、コミュニケーションをする機会、こういうものをやはり作っていくべきで、こうしたスポーツの機会を作れないのかなと。これは例えばゲーム性のある卓球でも、オリエンテーリングでも、ランニングでも何でも良いのですけども、何かそういったものを、いろんな人にコミュニケーションしてしゃべるみたいな機会を、速く、強くなるだけではなくて、コミュニケーションをする場としてのスポーツみたいなところが少しこれからキーワードになってくるのではないかと思いますので、ちょっとその、「する」スポーツの観点が大分違いますけども、そんなところも一つ何か引っかけていただくと、恐らく新しい動機が生まれてくるのではと思います。

以上です。

○松尾会長　はい、ありがとうございました。特に最後の、いわゆるマッチングアプリも良いのですけど、そこにリアルなコミュニケーションが生まれていくという、リアルとデジタルの融合ってよく言うけれど、それを本当に何か実際の現場で落とし込むということの大切さについても触れていただきました。ありがとうございました。

それでは、慶野委員に今度お願いしたいのですが、慶野委員がご事情のためにご退席

をなさいましたので、慶野委員から事前にコメントをいただいておりますものを事務局よりご紹介いただければと思います。お願いします。

○稲垣スポーツ総合推進部企画調整担当部長　慶野委員から事前にいただきましたコメントを代読させていただきます。

働き盛り世代におけるスポーツ実施に関し、仕事や家事、育児で時間をつくることが難しいとの傾向があるが、例えば親が子供との触れ合いの中でスポーツに親しむなど、育児の一環としてスポーツを楽しむようなことも考えられます。そうした点から親子、あるいは家族で一緒になってスポーツに触れる機会を創出していくことも重要であると考えます。

以上でございます。

○松尾会長　はい、ありがとうございました。

それでは、続きまして、スポーツ実施の機会を捉えまして、個人の健康促進だけにとどまらなくて、人との、先ほど話が出ましたけど、つながりですとか、あるいはダイバーシティへの理解促進、持続可能な環境づくりといった社会課題の解決へどのように貢献していけるのかという論点に移ってまいりたいと思います。

まず、岡田委員、長年スポーツ推進委員を務めておられて、現場経験を踏まえたご意見を頂戴できればと思います。よろしくお願いします。

○岡田委員　東京都スポーツ推進協議会、岡田でございます。よろしくお願いいたします。

先月行われました生涯スポーツ・体力つくり全国会議に出席させていただき、勉強させていただきました。第２次基本計画のする・みる・支えるから少子高齢化問題、コロナ禍、オリパラを経験し、スポーツの在り方について新たな項目が加わり、第３次基本計画ができたこと、重要なキーワードはスポーツ継続率で、地域コミュニティにより、みんなで作り上げていくことが継続率アップにつながっていく。作る、育む、集まり、ともにつながる、誰もがアクセスできる地域のつながりが重要なのだと改めて思いました。分科会のほうでは「Sport in Life」を支えるスポーツを通した地方創生・まちづくりを目指して」というテーマから静岡県三島市長の豊岡武士氏による「人もまちも健康に、人々をつなぐスポーツ推進委員」という内容の発表がありました。縦割り行政ではなく、縦横に各課と連携を図り、スポーツ推進委員が市民と行政をつなぎ、スポーツ好きな子供を育み、多様な方がともにスポーツを楽しんでいる様子に感銘を受けました。是非私、三島市に視察に行きたいと思いました。

私どもスポーツ推進委員は、常にそうありたいと思っております。

そして今月の初めに、都内の小学校からパラスポーツの授業を行う上で、ボッチャの講師を務めてもらえないかと、スポーツ推進委員に依頼をいただきました。教育の場でパラスポーツに触れる機会を持ち、共生社会について理解が深まっていることに大変うれしく思いました。実技指導では対戦形式で行い、歓喜と悲嘆に暮れながらもボッチャ体験を楽しんでもらいました。また、立位でできない場合、ボールが持てない場合のランプの利用、弱視の場合など、それぞれの立場に立って考えてもらうようにいたしました。パラスポーツの学習を、是非公開授業にしていただきまして、保護者とともに学習し、家庭に帰っても、パラスポーツ、スポーツに関して話題にできるようにしていただくと、スポーツの関心が高まるのではないかと思います。

現在、東京都のスポーツ推進委員は約1,500人なのですけども、ほとんどのスポーツ推進委員は、ボッチャの実技指導やパラスポーツの理解促進について指導を行えます。身近な地域の委員なので、地域に根を生やし、継続的にスポーツ活動を行います。是非、都内各地の教育の場に人と人とをつなげるスポーツ推進委員を利用していただければと思います。教育委員会が動いていただかないとなかなか難しいのですが、是非皆様のお力で、よろしくお願いいたします。

以上です。

○松尾会長　ありがとうございました。大変心強い言葉をいただきましてありがとうございます。

それでは、今いただきました視点も含めまして、原委員のほうから、もちろん日本を代表するスポーツの指導者でもいらっしゃいますので、スポーツ推進という点からもそれを一歩進めて、社会課題の解決に向けたところで、東京都は何をすればいいのかといったところも含めてお話しいただければと思います。よろしくお願いします。

○原委員　ちょっと総論的な話になるかと思いますが、「文化」と「文明」について、今日来る前に辞書を調べてきたのですけれども、「文化」とは特定の地域、集団で生成され、受け継がれた生活様式、人間の知識の発達により生み出された精神的なものということです。「文明」は人間の知恵の発達により生み出された技術的、物質的なものということで、技術力が上がるというような形で精神面と技術力の向上の違いがあるかと思うのですが、経済的に豊かになった日本が、様々な施設等々がより優れたものができてきた、陸上で言えばグラウンドが全天候型となった、靴も薄底シューズが厚底シューズ

になって記録が向上していったりというようなところがあろうかと思うのですけども、この「文化」というものは、やはり今日、明日で変えられるものではなくて、長く受け継がれていくものの考え方なので、この「する」「みる」「支える」というものをデータ的に上げようと思っても、なかなか今日、明日で変えられるものではないと私は思うのですよね。

その昔は、そもそも体を動かすとか、スポーツを見るというのは、わざわざこういった会議を開かなくても当然のごとくやるということだったと思うのです。時代の流れの中で様々な規制を、我々人間がかけた結果として身近にスポーツができない環境が生み出され、結果としてスポーツ文化というものが失われてきているのかなと僕は感じています。例えば、その昔であれば小学校に気軽に行ってグラウンドで飛んだり跳ねたりしていたわけですよね。あるいは公園でも、サッカーボール蹴りやバット振りができたわけなのですけれども、今頃の私の近所の公園でも、危ないボール蹴りやバット振りはやめましょうって、何が危ないのかなと思うわけなのですけれども、そういうふうに我々自体がそのスポーツという文化を自分たちで規制をかけてきた歴史があるのかなというふうに思うのですね。やはりそういった文化を継承してスポーツをよりよく豊かにさせるためには、まずは規制というものを少し考えてみて、規制緩和ということを少し考えてみる必要があるのかなと感じたところでございます。ちょっと総論的なことで大変恐縮ですが。

最後に、白戸委員からもありましたように、20代から40代というものは健康を意識してスポーツをやるという意識は、あんまり僕はないのではないかなと。そもそも僕はまだ健康だと思っているので、そのスポーツのために健康をという意識がない。だったら、仕事が忙しいので寝ていたほうがいいとか、ゲームをしていたほうがいいとかということで、スポーツに対する意識がないのは当然なことなのかなというふうに思ったと。じゃあ、何を目的にと言ったら、白戸委員もありましたように、私もそう思っています。出会いの場だと思うのですよね。ですから、スポーツを通して婚活事業といかにタイアップしてやっていくかという視点でやれば、若者のスポーツに志す文化というのは広がってくるのかなと。やっぱりスポーツはレクリエーション、楽しみですからね。その先に何が楽しいかという視点で捉えたほうが僕はいいかなと。競技スポーツは別ですよ。そういったところだと僕は思っています。

以上です。

○松尾会長　ありがとうございます。今、非常に大きなお話もいただきました。確かに私どもはスポーツ文化の醸成といいましょうか、スポーツ文化をより成熟した社会に適応できるようにちゃんと成熟させましょうと言いながら、やろうとすればするほどある種の規制をどこかでかけていく、その規制が実を言うとスポーツ文化を成熟させるのを止めてしまっているのではないかというご指摘は非常に示唆的なところだなと思ってお聞きしたところなのですが、それをどうやって乗り越えていけばいいのかというお話の中で、規制緩和というお話がありました。どうやってそれを展開していけばよいとお考えでしょうか。

○原委員　アメリカのボストンだったか、道路にマーカーが引かれていまして、その先に行くと、例えば東京都の名所を結果として回れるようになるというような、パンフレットを見てそこに行くのではなくて、もう道路にいろんな名所、旧跡に行けるようなコースが設定されているのですね。例えば、はとバス版ランニングコース、車でそこへ回るのではなくて、その道路にそう書いていますね。ウオークでそこへ行けるとか、走っていけるとか、Ａコース、Ｂコース、Ｃコース。その先にゴールとして浅草があった場合には、そこに温泉施設を使えて、そのまま浅草に飲みに行けるとか、そういうコースをある程度設定しているとか、あるいは東京マラソンは年に１回ですけれども、例えばもう東京都が定める月に一度の、土日どっちでもいいですけど、日曜日はランニングデーと称して、銀座通りや東京都のマラソンコース辺りをブルーのラインである種染めていまして、そこを自由に走れるコースを作るとか、これは全て、多分規制がかかってきているのでできない話なのですけども、そういうふうに規制を取っ払っていけば、おのずといろんな施策ができてくるのかなというふうに感じるのですけどね。

○松尾会長　ありがとうございました。今、規制を越えるための一つのヒントとして私が今お聞きして考えていたのは、アフォーダンスというのでしょうか。要するに、環境の働きかけに応じて人は行動するという考え方でございまして、疲れたから椅子に座ると考えがちですが、それだけではなく、座りたくなるような椅子があると、その椅子が、あたかも座ってくださいと問いかけてくるから思わず座るというようなことでございます。その議論を応用すると、ここを走ったらどうですかとか、ここを走ったらもっと楽しいよというような環境的な誘導があったり、その規制から一歩進めた何か、もちろん規制も必要なのだと思うのですけど、それを乗り越えた魅力というか、そういうものが一つの突破口になるかもしれないと思って、原委員のお話をお聞きしておりました。

○原委員　ちょっと参考になるか分かりませんが、一時流行ったポケモンＧｏですか。あれって非常にいいですよね。あれを基に歩く人が、かなり外で動き回る人が増えましたよね、実際。だからゲーム感覚、ゲーム性というものをある程度出していく必要ってあるのではないかなと思いました。

○松尾会長　なるほど、ありがとうございます。貴重な意見をいただきました。

○原委員　それと最後に、決して僕は、こういった会議があるからこそスポーツ文化が失われずして伸びていくということで、会議を否定するわけじゃありませんので。もう昔はそういう会議も何もなかったのが、こういう会議を通して文化を構築できるということなので、これがなくなったら、もうスポーツ文化がなくなりますので、この会議は非常に重要なものでございます。

○松尾会長　ありがとうございます。

それでは、次に、宮地委員にお話をお聞かせいただければと思います。継続した運動によって得られる健康への効果とか社会的課題の解決に向けたヒント、あるいは導きをいただければと思います。宮地先生、お願いします。

○宮地委員　はい、ありがとうございます。今日の審議の主題のスポーツは、余暇時間に楽しみといった目的を持って、意図を持って体を動かす行為を指すわけですけれども、スポーツをやればメタボは言うに及ばず、最近ではフレイル、認知症などに対する予防効果がよく分かっています。多くの国民、都民が、特に高齢者の方々を中心に、健康問題を解消するという目的でスポーツに取り組んでいる方がとても多いというのが現状です。

ところが一方、都の調査でもありますように、20代～40代の方々はそもそも健康な方が多いですから、健康に対する関心が低くて、健康目的でスポーツに取り組む方が少ないためか、今の若い方の実施率が低いという調査結果になっていると思います。

後ほど「みる」スポーツの話があると思うのですけれども、最近の研究で明らかになってきたことは、「みる」スポーツがその将来の死亡のリスクに関わっていると。スポーツを見て、それを楽しんでいるスポーツファンの人たちは病気になりにくいとか、あるいは寿命が長いというエビデンスが最近出てきました。

それに加えて、最近ではその健康の視点が広がって、ウェルビーイングという考え方が出てきました。単に、元々健康の概念の中には精神的にも社会的にも健康な状態というのがあるのですけども、より良い生き方という意味でウェルビーイングという概念が

出てきましたが、スポーツを見ることがそのウェルビーイングを高めているといった介入研究の結果なども出てきています。

そういったことを考えますと、スポーツの振興の中に、「する」スポーツの割合を高めていくことに加えて、「みる」スポーツの割合を高めていくということに取り組んでいる東京の取組はとても先進的だと思います。「する」スポーツの手前に「みる」スポーツというものがあると思いますので、「みる」スポーツも健康に良いのだよねということで、スポーツをすることが嫌いな人たちにも、「みる」スポーツから入っていただくという切り口を持っていただくというのが一つ必要かなと思います。

それから、働く世代というのは実は収入もありますし、体力もありますし、社会の推進力であって、とてもロバスト、頑強で健康であると皆思っているかもしれませんけれども、最近の私どもの調査では、実はこの世代にも20％ほどフレイルに該当する人がいるという、非常に驚く結果が大阪の調査で分かってきました。この要因は、身体的というよりは、むしろ社会的、あるいは精神的要因の方が多いわけですが、フレイルのような健康問題を若い人も持っているんだ、心や社会の問題を解消するのにスポーツが良いのだ、といったようなアプローチもこれから必要になってくるだろうと思います。まず「する」スポーツよりも「みる」スポーツで、みんなで楽しんで、大いに盛り上がってみる。東京の今の取組の中で、「みる」スポーツを通して健康になっていくという視点が入ることで、一つ面白い展開が今後期待できるかなと思いました。

以上です。ありがとうございました。

○松尾会長　ありがとうございました。「みる」スポーツが実は健康に極めて効果的であるというようなご指摘というのは、あまり今まで言われたことがなかったかと思います。貴重なご示唆をいただきましてありがとうございます。

今、「みる」ということについても宮地委員から触れていただきましたが、続きまして、今度は「みる」という点に少し焦点を絞りまして、お話をお聞かせいただければと思います。スポーツを直接観戦してもらうためには、どんなきっかけづくりがあるのだろうかというような、やっぱり「みる」から「する」へという、あるいは「応援する」へ、というのは一つのきっかけになるというお話をいただいたところかと思います。

まず、最初に、ゼッターランド委員にお話をお聞かせいただければと思いますけれども、まさにバレーボールのもちろん専門家でいらっしゃいますけれども、プロスポーツの知見だとか経験なんかも踏まえまして、是非お話をお聞かせいただければと思います。

よろしくお願いします。

○ヨーコ・ゼッターランド委員　ありがとうございます。まさに今、宮地先生がおっしゃったように、「みる」スポーツから入る、メンタルもそうですけど、健康になっていくという、多分それは最初に気持ちのほうからというのはあると思うのですが、私は先日、パラリフティングの知人がおりまして、実は初めてパラリフティングというものを観戦するに至ったのですけれども、それが東京都の施設ではなく恐縮なのですが、築地本願寺の第二伝道会館というちょっと小さめのホールのところでやるということだったので、どのようにしてやるのかというのがすごく、それも興味があったので行ってみましたら、仏像を全然隠さずにそれを露出したまま、周りはプロジェクションマッピングで龍が上っていく様子ですとか、バブルが飛んでいるような様子を醸し出しまして、もう会場内そのものがイベントなのですよね。もちろん選手権をやっていますので、それはすごく真剣なのですけれども、その空間に行って、確かに知人の応援に行ってはいるのですが、その空間にいることの心地良さとか、そういった、全くスポーツ施設ではないところをこういう形でスポーツを実施できるのだ、すごくエンターテインされた気持ちになって、空間にいることが楽しく、興奮もしましたし、それによってすごい気持ちが満足して帰ってきたというのがありました。ですので、改めてそのスポーツを見に来てもらうきっかけをどう作っていくか、様々な形というのがあると思うのですが、やはりその空間が、スポーツ観戦がメインかもしれないのですけれども、空間にいることの心地良さをどれだけ感じてもらえるかということが何かすごく大事なのではないか、ということを思い出しながらお伝えさせていただきました。先ほど出ておりましたそのデータの中で、スポーツ以外のイベントがあれば良いなという、たしか15％ぐらいの方たちが仰っていたというところなのですが、なかなかスポーツイベント一つを開催するというのは、本当に大変なことだと思いますが、やはり印象として、競技そのものを見に行って応援することがどうしても一番のメインになりがちなのですが、その人にとってメインイベントというのは、いろいろな響き方があると思いますので、例えばこういったデータが一つあるのであれば、当日にメインイベントはメインイベントとして残して、その日一日が全てそこに行くとその空間が楽しめるというような形であったら良いのではないかなと思います。

先ほど、すみません、ちょっとどなたかが仰っていたのですけども、例えば、その前座でも親子でのイベントですとか、あるいは、先ほどインターハイとか開催のお話もあ

りましたけれども、子供たちがそこに行って会場でできることって、まずないわけですよね。そうなのであれば、やっぱりそれを体験できるような、プレのイベントではあるけれども子供たちにとってはそのメインの大会がそこでできるとか、そこには親御さんたちもいらっしゃるかと思いますので、自分が動かなくても人のためには動くということもやっぱりあるかと思いますので、そこに一緒に来て、そして楽しんでもらい、かつ、メインのイベントも見てもらえればとか、いろんな仕掛けというのがあるのではないかと思います。

アメリカの例でちょっと恐縮なのですけれども、例えばバレーボールのＮＣＡＡのファイナルが年の一番最後にあるのですけれども、それまでに３日間ほどコーチカンファレンスというのが開催されまして、アメリカ全土から、それはバレーボールに特化しているのですけども、コーチが来て情報交換の場であったりとかオンコートレクチャーであったりとか、それが全部終了した後でＮＣＡＡのファイナルを見て全体のイベントが終わるという組み合わさった形で実施されているというのがあるのですね。組み合わせ方はいろいろあると思うのですが、そういった形でより多くのジャンルの方が集まれる、そういうような空間づくりがもしできるのであれば良いのかなと思いながら、そのように考えておりました。

すみません、ちょっと長くなりました。以上です。

○松尾会長　ありがとうございました。大変多岐にわたって貴重なご示唆をいただきました。これからのイベントの在り方も含めてご示唆いただきまして本当にありがとうございます。

続きまして、「みる」から「する」へ、「支える」へ、どのようにそれをつなげていけるのか、また、スポーツ観戦を通じた地域の活性化や、いわゆる観光資源化なども含めて、どんなシナジー効果を発揮できるかという論点についてご意見をいただきたいと思います。

まず、上代委員のほうからご示唆、ご指摘いただければと思います。よろしくお願いします。

○上代委員　上代です。すみません、否定的なことを言うつもりはまずないというところからちょっと言いたいのですが、まず観戦のきっかけ、無料（タダ）で来た人は二度とタダじゃないと来なくなる可能性が非常に高いというところがあります。したがって、きっかけづくりとして、チケットを配るというのは一つのやり方ではありますけれども、

じゃあ、その先にどうやってリピーターにつなげるのか、または、「する」スポーツのほうにつなげるのかということをきちんと考えないと、ただ来てもらえばいいよねということで、タダで配った人は、次もタダじゃないと来なくなる可能性って非常に高いんですね。

例えば、Ｊリーグの浦和レッズって絶対招待券を配らないのですよ。タダで来た人は二度と来ないというのが分かっておりますので。ただ、その先に、例えば子供たちはタダにする、だけれどもお父さん、お母さんは払ってねということであれば、それは一つの払うという行為はありますのでいいのかもしれないのですが、なので、その先にどうつなげていきたいのかを考えないと、ただ呼べばいいよねということでは少し危険かなと思って、すみません、聞いておりました。

そのつなげるという部分なのですが、見に来たときに、例えばパラスポーツもそうなのですけど、車いすバスケってすごいねってうちの甥っ子、言ったのですよ。じゃあ、どっかでやってみる、って言ったときに、ないのですよね、やれる環境って、そんなにすぐに。なので、それがセットになるような形で持っていくというのも、一つアイデアとしては面白いのではないかなと。

例えば、鶏と卵になりますけど、パラリンピック期間中に、皆様、どこまでご存じか分からないのですけど、お台場のほうでパラスポーツの体験会をやっていたのですよね。私、平日に行ったら、私の家族ともう一家族しか誰もいませんでした。もうやりたい放題という状態で。ただ、そうした体験をすると、今度見てみたいということにもなりますし、ですので、そのつなげていくということを、ただ来てもらえばいいよね、ただやってもらえばいいよねということではなくて、少し広い視野でそこをつなげるという工夫も加えてやったほうが良いのではないかなと思います。

あとすみません、少し話がずれてしまうのですけど、今このアンケート用紙の原資もちょっと後ろに載っていたので見せていただいたのですが、「スポーツをやりましたか」と訊いたときの、「スポーツ」のハードルは高いなと少し思ってしまったのですね。スポーツとはこういうものです、また、健康づくりであったりとか目的をもって動いたものであればスポーツに含めていいですよって言われてしまうと、これ、ちょっと先ほど原先生もおっしゃいましたけど、ポケモンＧｏ、これ、目的がポケモンだから入れて良いのかなとなってしまったりするのかなと。今、スポーツが好きではない人たちってハードルをかなり下げないと（スポーツを）やらないと思うのですよね。

あと、東京都としてどう考えるのか分からないのですけど、ｅスポーツ、ここに含まれていないのですよね。もちろん規制緩和で子供たちが外でスポーツできればもちろん良いのですけど、例えば小さい子、今のご時世、一人で公園に行って、じゃあ体を動かしておいでって親御さんは多分心配でさせられないのですよね。だったら、テレビゲームをきっかけにして、例えばＷｉｉでやるとか、そういうものって一つのきっかけになると思うのですよね。実際のテニスをやってみたいと思ったら、今度、お父さん、お母さんと外に行ってやれば良いのだと思いますし、ですので、きっかけづくりというものとその先にというのをセットで考えていくことが必要なんじゃないかなと思いました。

まとまりがない話で申し訳ないのですが、以上です。

○松尾会長　はい、ありがとうございました。やっぱり、「みる」と「する」をセットにして考えていく、あるいはテレビ、デジタル、そこから「する」へという多様なきっかけというものを想定しながらやっていくということが非常に重要なのではないかというご指摘は非常によく分かりました。ありがとうございます。

それでは、続きまして高橋委員からご示唆いただければと思います。高橋委員は様々な、岐阜においてマラソン大会を開催されたりとか、地域活性化に取り組んでもいらっしゃいますけれども、ご意見ください。お願いします。

○高橋委員　ありがとうございます。失礼いたします。

今、ご紹介がありましたが、４月に岐阜で清流ハーフマラソンというマラソンを大会長として開催をしています経験を踏まえて、地域の活性化や観光資源化などに向けてスポーツのシナジー効果を生み出していると言っていいのか、そういった経験を少しお話しさせていただきたいと思います。

まず、大会自体そのものの趣旨は、世界を見据えたエリートの大会ということで、トップアスリートを世界から呼んでいて、あと１万人の市民ランナーが楽しめる大会となっています。そして、そんなトップの選手を間近で見ながら空気を感じてもらえるように、ジュニアの子から３キロを走れるような部門を作っていまして、そこで親子で参加してもらったり、また、近くで姿を見てもらって自分の夢へつなげてもらうという機会を作っております。

一つのマラソン大会だけということではなく、大切にしているところは連携ということです。その連携の一つがアーティストとの連携です。もちろん、一般ランナーの方で走りたいという方もいらっしゃるとは思うのですが、もっともっと多くの人たちに足を

運んでいただきたいこともありまして、必ず、大会の後にアーティストのコンサートを一緒に行っております。今までだと、サンプラザ中野さんやパッパラー河合さん、プリンセスプリンセスの富田さんやｈｉｔｏｍｉさんや、いろんな方に来ていただいているのですけれども、そうすることによって、走った人たちだけが楽しむのではなくて、ボランティアの人も、支える人も、応援をする人も、そしてもちろんそのアーティストのファンの人たちも会場に来ていただいて楽しむことができるということで、みんなが楽しめる。付添いの人たちも来る人たちが多くなったのかなと感じております。

そして二つ目の連携が、岐阜の商工会との連携、観光との連携ですね。その会場には楽市楽座といいまして、岐阜のおいしいものの食べ物がずらっと並ぶ屋台を作っております。そうすることで、夏祭りの感覚ですね。そこに行けばおいしい食べ物を食べることができるから、そこに行って何か観戦をしながら時間を過ごそうという方もたくさんいらっしゃいます。１万人の参加だと来場で約３万から５万人の皆さんが来るということで、初めは大会の会場と駅の往復だったのですけれども、それではもったいないということで、商工会の方とその間にある柳ヶ瀬という、ちょっと岐阜では寂れた町になっているのですが、そういったところをうまく経由して、そこでも祭りをすることによって、運搬のバスをそこでも降車できるような形にして誘導していき、岐阜全体を盛り上げるような形にしています。あと、観光としては、前日のホテルや終わった後の観光をうまく組み合わせたチケットを販売したり、また、前日宿泊をなるべくしてもらうために、夕食をとってもらうようなおすすめのマップを参加者の方に配ることによって、そこで食べていってもらえるといったような足がかりにしております。

連携の三つ目としては、学校との連携ですね。岐阜の小学校の子供たちに１万人の参加者分のゼッケンを作成してもらっています。ゼッケンは前後の二つあるのですが、前は１番、２番の数字、後ろ側に子供たちの応援メッセージや絵を描いたものを全部描いていただいております。これはコロナ禍で観戦、応援がなくなったときに、すごく寂しい中で走らなければいけないではなくて、岐阜は関係していますよという思いを込めるために後ろのゼッケンを子供たちにカラフルに描いて応援をしてもらうことによって、走っているみんなは、声は聞こえなくても自分から見える全ての人の背中にはそんな岐阜の子供たちの明るい応援が描いてあるということで、元気に最後まで楽しく走ってもらえる、岐阜に歓迎してもらえているのだというような思いを持ってもらうために、学校との連携をしています。

また、子供たちが描いた絵の中で優秀なものに関しては、大きく引き伸ばして、５キロ、10キロ、15キロというような給水の場所に大きく貼って、皆が見られるような感じにしています。自分がもらったものだけではなくて、他の人がどんなものを描いてあるのかなというのも見られることができるので、他の人にもプラスになっているのかなと思っております。

中学校の生徒たちにはボランティアで参加をしてもらうことによって、よりスポーツの中に入ってもらうということをしています。

また、あとは、５番目に警察との連携ですね。岐阜県警をはじめ、関係の三つの警察署を回らせていただいているのですけれども、この岐阜清流の中で交通部長などをやらせていただきながら、幼稚園や高校、大学、シニアの方々への講習会をすることによって、その警察との連携をうまくすることによって、道路封鎖などの情報をうまく市民の皆さんに周知をしていただくことによって、今まで11回開催をしているんですけども、この11回の開催の中で、岐阜県警をはじめとした警察署に苦情連絡が実はゼロ件ということで、岐阜にすごく歓迎、みんなが主体になって大会に参加をしてもらっているような大会になっているのかなと思っております。

これからは海外との連携も今考えているところなのですけれども、そうやって少しずつ広げていければということで、一つの大会、一つのきっかけをうまくどれだけ連携をさせて、つなげていけるかというのがポイントなのではないかなと感じております。

そういったところでは一つ提案なのですけれども、私、東京都のアーカイブ資産のアドバイザリーの委員もさせていただいております。そこでは、来年度、有楽町の駅の東のところ、ここでもアーカイブなので、東京オリンピックのいろいろな資産、東京都でも有している資産をいかに皆さんに見せるかということで、スポーツ大会であったり、いろいろなところで展示をすることもあったのですが、もっとスポーツに興味がない人も取り込んでいくことが必要なのではないかということで、東京スポーツスクエア、有楽町の駅の東のところにあります一部を使って、そこで展示をすることを予定しております。そこにはＶＲであったりとか、ステージで選手が来てお話をしたり、これも東京の世界陸上やデフリンピックに向けての機運醸成なのですが、そういったきっかけをうまくつなげて、今ある既存のスポーツ施設と、そこで興味を持った子供たちや親たちがそこから次の段階という、点から線につなげるために何か催し事をしていくというようにつなげていければ、また一つの行事になってくるのかなと思っておりますので、そう

いったところをここのスポーツ審議会でも何か検討していただいて、うまくアーカイブのほうと連携をしていただけるのがいいのではないかなと思います。

すみません、長くなりました。

○松尾会長　いえ、ありがとうございました。大変よく分かりました。ありがとうございます。特に、さっきゼッターランド委員のほうからイベントの多様化ですとかエンターテインメント化という問題も含めてお話しいただいたのと同時に、今、高橋委員からは連携の大切さについてお話をいただきました。連携をすることによって今まであんまり関心のなかった人たちも一緒になって楽しめるという、いわゆる連携は新しい扉を開くというのでしょうか、そういったキーワードで何かお話をいただいたような気がいたしました。大変勉強になりました。ありがとうございます。

すみません、残り時間が大分迫ってきてしまっておりますが、ここから先がまた重要なところでございますので、もうしばらくお時間をいただければありがたいです。

続きまして、今度は障害者のスポーツに関する意識調査につきまして、事務局から意見交換のポイントにつきまして、概略のお話をいただければと思います。よろしくお願いします。

○上山スポーツ総合推進部パラスポーツ課長　それでは、障害者のスポーツに関する意識調査の結果につきまして簡単にご説明をいたします。

令和４年度の18歳以上の障害のある人のスポーツ実施率は35.2％で、左上のグラフのとおり推移をしてございます。また、右のグラフのとおり、過去１年間で運動していないという人の割合は44.4％と約半数に上っております。

次に、スポーツを実施した場所につきましては、道路や自宅などの身近な場所で取り組む方が多くなっております。また、一緒に実施する人は右のグラフのとおり、一人または家族の割合が高くなっております。一方で、スポーツを通じた社会参加という視点で見ますと、グラフの一番下、障害のある人やない人など様々な人がいるサークルの仲間については、割合としては少ない状況でございます。

次に、スポーツを実施しない人の傾向についてです。その理由については、活動したいと思わないという人が７割を超えておりまして、また、活動したいが身体的にできないと回答している人も一定数いらっしゃいます。さらに、活動したいと思わない理由の内訳につきましては、右のグラフのとおり、「分からない」が約６割となっております。実施率の向上に向けては、こうした無関心層に対するアプローチを強化することが重要

と認識しております。

次に、スポーツや運動を行う際に必要と考える支援につきましては、会場までの送迎や適切な指導者、バリアフリー化等、ニーズは多様となっております。右のグラフの、どのようなスポーツや運動であれば参加したいかという設問に対しては、「自分のペースに合わせてできる」などが上位となっております。事業の企画に際しましては、これらの声を踏まえたプログラムの工夫が必要と認識してございます。

以上の調査結果も踏まえました次年度の取組の一部をご紹介いたします。東京都としましては、障害のある方が身近な地域でスポーツ活動に親しめるよう、区市町村に対する企画立案の支援や財政的な支援を行っております。特に障害のある方のニーズに沿った事業を行えるよう、スポーツのほか、福祉、医療、教育等の連携体制構築の後押しを引き続き実施してまいります。

真ん中の運動習慣定着支援事業についてです。こちらは福祉施設等の行き慣れた場所での定期的な運動実施を支援するとともに、スポーツ施設に出向いていただくきっかけを提供いたします。事業実施の際には地元の指導人材やスポーツ施設職員等とも協働しまして、将来的な障害者のスポーツ活動の受皿を増やしていきたいと思っております。

一番下の都立特別支援学校活用促進事業についてです。従来は、事前予約制のレクスポーツ教室等の実施をしてまいりましたが、来年度からは予約せずに気軽に参加できて、かつ、障害特性に応じて自分に合った種目を選択できる教室の開始ですとか、また、芸術文化のパフォーマンス等とも連携し、参加するきっかけを提供してまいります。

次に、ｅパラスポーツ事業についてです。障害の程度等の様々な理由で外出困難な方などに対して個々の状態に合わせて加工した機器を各福祉施設に提供しまして、ｅスポーツを楽しんでいただく事業でございます。

最後に、スポーツ施設利用促進事業につきましては、こちらは先ほどご報告をさせていただいたとおりです。

最後に、ご意見をいただきたい論点についてご説明をいたします。資料、下のほうですけれども、一つ目は無関心の人や、運動したいができない人でも取り組みやすい環境をどのように整備していくかです。幾つか検討の視点を記載してございまして、特に場所や機会、連携先、デジタル技術の活用等の点からご意見をいただければと思っております。二つ目は地域のスポーツ活動に参加していただくための内容や広報の工夫についてでございます。スポーツから遠ざかっている人にどのような内容であれば関心を持っ

ていただけるかですとか、障害のある方に情報を届けるための広報の工夫などについてご意見を頂戴できればと思います。

説明は以上です。よろしくお願いします。

○松尾会長　はい、ありがとうございました。時間がない中に適切にまとめていただきましてありがとうございました。

それでは、早速ですけれども藤田委員に、是非ご意見を頂戴したいと思います。藤田委員、よろしくお願いします。

○藤田委員　私のほうからは、まず、障害のある人もない人も共通のことなのですけども、スポーツが好きな人をたくさん作る、できるだけスポーツ嫌いを作らない、ということを考えないと、例えば障害のある人で無関心層をどうするかという、これはなかなか減っていかないと思うんですね。それから、障害のない人でも、運動しない理由として、時間がないとか、忙しいとか、いろいろ出てきますけども、スポーツをやっている人はみんな忙しくないのかというと、決してそんなことはないと思うのですね。その違いは何かというと、恐らくスポーツをやって良い思いをしたとか、スポーツの価値が分かっているとか、楽しかったとか、そういう経験があるか、あるいは逆に、スポーツをやって嫌な思いをしたとかということじゃないかと思うんですね。ですから、子供のときとか、そういったときからのスポーツ、特に体育ですよね、その中でスポーツ好きを作っていくということがとても重要ではないかなと思っています。

これは東京都の調査ではないのですが、スポーツ庁の調査では、通常学級にいる障害のある子供がスポーツ、体育をあまり楽しめなかったとか、参加できなかった理由として、内容が高度過ぎ、自分ができないと思ったとか、あるいは、ほかの友達の迷惑になるから参加しなかったとか、これはもう明らかに先生がどういうふうにしていいのか分からないというようなところの影響が出ているのではないかと思います。

それから、特別支援学校などでも援助をしてくれる人が少なかったので自分はできなかったというようなことが出てきますので、スポーツをやらずに、あるいは楽しいという思いをせずに学校を出て、結局無関心になっていくという人が多いのではないかなと思っています。無関心層に直接何かをするということももちろん大事なのですけども、それと併せて、今、体育とか子供時代、スポーツをやりやすい環境にあるうちにスポーツ好きをたくさん作っていくということが非常に重要なのではないかなと思っています。

それから、あとはその地域での取組ということなのですが、これは先ほどの意見のと

ころでも言ったのですけども、「障害のない人」ですね、一般の地域スポーツクラブにしろ、体育施設やスポーツ施設にしろ、そういったところで「障害のない人」が「障害のある人」を受け入れる、「障害のない人」の障害者理解を進めていかないと、なかなか「障害のある人」が入ってこられないとかということがあると思います。そこを併せてやっていく必要があるかなと思います。

これは「障害のある人」のことではないのですが、40代以下の人のスポーツ実施率が低いとか、あるいはスポーツ観戦の話が出てきていましたけども、宮地先生のお話で、見るだけでも非常に効果があるということで、非常に自信を持ったのですが、例えば、プロ野球観戦に行った女性が、次の日から野球を始めるということはまずないと思う。それはもう猿が人間になるくらい時間がかかりそうな感じがするのですけども、例えば、去年であればきつねダンスとか、あるいは以前、マカレナダンスとかいろいろとあったじゃないですか。ああいうのは、体を動かすことですごく楽しいし、スポーツとは思っていないけども、体を動かすことが好きな人をたくさん作ると思うのです。スポーツを見に来た人にそういうのを知らず知らずのうちに好きになってもらうというような、邪道と言われるかもしれませんが、これまでいろんなことをやってきてなかなかこの層が増えてこないということは、これまでやってこなかったことをやったほうがいいなと思っているので、そんなことも考えると良いかなと思いました。

以上です。

○松尾会長　ありがとうございます。非常に示唆に富んだお話を賜りました。ありがとうございます。

それでは、今度は鈴木委員のほうにお願いできればと思います。鈴木委員、よろしくお願いします。

○鈴木委員　すみません、ご紹介いただきました東京都議会の鈴木純と申します。

ご意見を述べさせていただきますが、今までの先生方のお話の中で様々なことを逆にいろいろと教えていただきまして、ありがとうございます。

これからの東京都の事業としても、これからもまたやっていくということもあると思うのですが、福祉作業所に派遣するアウトリーチ型というのは、私は非常に重要だなと思っております。この資料には書いていないのですが、そもそも障害をお持ちの方はいろんな障害がありますので、それに合わせた、やはりプログラムというか、そのスポーツをどういうふうに、Ａさんはこういう形で、Ｂさんはこういう形で、と進めていくの

かというのが非常に重要なのかなと思っております。

一番はその辺りを言いたいのですが、そうした派遣をしていただいて、それでもやりたくないと言うのであれば、もうしょうがないのかなと。私、浅草とか上野とかを抱えている台東区に住んでおりますが、台東区というのが23区でも一番小さくて、１周10キロしかないのですね。スポーツをしたいけどできないという課題を結構昔から持っておりまして、逆な部分も持ち合わせている区であります。

このスポーツをまずどういった形で行えるような形に持っていくかというのが重要でありますし、また、その地域との連携、これは行政、各区市町村との連携というのも非常に重要であると思いますし、また、その区市町村ごとに、例えばスポーツ施設をこれから活用、福祉作業所で働いている方が施設をどういうふうに、区市町村の、行政の施設を活用するに当たっても、例えばそれは地域ごとによってまたいろいろと課題があると思うのですね。そこの福祉作業所からどのくらいの距離が離れているかとか、その住んでいるところからどのくらい近くに施設があるのかとか、いろんな部分でいろんな課題が出てくると思うので、そういった部分もこれから東京都さんにもより中に入っていただいて、現場を見ていただければなと思います。

以上です。

○松尾会長　ありがとうございました。貴重なご意見をいただきました。ありがとうございました。

それでは最後に、延與副会長のほうから、全体の総括的な意見も含めてご発言をいただければと思います。よろしくお願いします。

○延與副会長　総括的になっているか分かりませんけれども、まずは、先ほど来年度の予算のお話もございまして、東京都におかれましては来年度も障害者のスポーツの予算を充実させていただいて、本当にすばらしいことだと感謝申し上げます。

その上で、先ほどの資料のご説明の中の、スポーツ実施率のところを考えていたのですけども、今35％でほぼ横ばいということで、目標50％ということですが、実感として考えたときに、障害者、重症の方から軽い方までいらっしゃいますけれども、重症の方であれば、そもそもそのスポーツ活動にどうアプローチするのが難しい。また、軽い方であっても、健常者以上に生活の苦労を重ねながら、スポーツに割ける労力がある方が少ないことを考えたときに、この35％ってかなり実感としてはすごく頑張っているなという感じがしまして。今後、次の計画のときに、本当に50％というのがリアルな目標な

のかというと、私はちょっと、精神的な理想の目標としては良いと思うのですけども、そこなのかなと。むしろ、今日お話を伺っていて、運動を１年間に１回もしたことがない人が44％という、こちらを何とかして、何らかの活動に参加し、そこで先ほどから皆様お話がありましたけど、「スポーツは楽しい」ということを味わっていただいて、習慣化につなげていくという、かなり遠大なことなのかなと思っております。

そういう意味で、何とか今、スポーツに関心のない方にどう、障害者の方にもスポーツをやっていただくかというところが最大のテーマであるということですけども、その際に、私はポイント二つなのかなと思っています。一つは福祉とか地域との連携が最も重要で、東京都の側でどんなに素敵な事業を用意しても、そこに来られない方、あるいはそのことを知らない方にリーチしていくためには、やはり地域と一緒にやっていくしかないと思います。ということで、来年度福祉とのコラボをさらに進めるということ、とても素晴らしいことだと思いますし、それに加えて私が気になっていますのは、障害のあるお子さんは、学校にいる間はスポーツ、体育があるんですけども、卒業した瞬間に全くスポーツへのアプローチがなくなってしまうということで、何か具体的な案があるわけではないのですが、教育庁などと連携をして、卒業後のスポーツの受皿みたいなことって何かやっていけないのかなというのが一つ課題として思っております。

大きなもう一点が、今日のテーマではないのですけども、支え手というところに行き着くのかなと。おかげさまでパラリンピック以降、自治体ですとかいろんなところでパラスポーツ体験会をやったり、学校でもパラリンピック競技みたいなものも続いていますけども、なかなか事業を企画したり教えたりする、できる地域の人材というのが圧倒的に不足していると感じています。先ほど、スポーツ推進委員のお話がありましたけれども、東京ではスポーツ推進委員の方にパラスポーツ指導員の資格を取っていただいて、本当に活躍していただいているのですね。なので、そうしたパラスポーツのイベントを、良いものを企画して、実施できる人をどう確保していくかというところがその人たちに対する処遇も含めて、今後進めていく非常に鍵になるのかなと。これはパラスポーツだけじゃなくて、部活の地域化とか言っていますけれども、それを教えられる人に適正な対価を払って受皿になっていただけるのかというのが、大変スポーツ全体の大きな課題だと思っておりますので、これはスポーツの分野だけで解決できることではないかもしれませんけれども、そんなことを考えておりました。

あまりまとめにはなっておりませんが。

○松尾会長　ありがとうございました。貴重なご意見をいただきましてありがとうございました。

今日のお話は、無関心層に関心を持ってもらってスポーツをやってもらうということを含めて、今までの文化的な、スポーツ文化としての枠だけで考えていくとちょっと難しいかもしれないねというお話であったかと思います。それが規制絡みで起きるというお話を原委員からもいただきましたし、もっと今までにない発想や視点ということが非常に重要なんじゃないか。例えば、着替えなくていいスポーツというようなものですとか、見るだけで実は健康にいいというエビデンスも含めてなんですけど、皆びっくりしているわけですけれど、そういうものですとか、あるいは、「する」とか「みる」というのをセットにしたり、あるいは多様にしたり、エンターテインメント化したり、連携をすることによって新しい扉を開いたり、そういうようなことが非常に多角的にできる可能性が開かれているんじゃないか、そういうことがスポーツ嫌いを作らない一つの方法でもあるだろうし、新しい文化を作っていく一つのきっかけになるんじゃないかと、そういうようなお話をいただいたように思いました。非常に示唆に富んだ貴重なご意見をいただきましてありがとうございました。

○上代委員　先生、１点だけいいですか。

○松尾会長　どうぞ。

○上代委員　パラスポーツのところで、アンケートに「支える」が出てこないのですね。実はうちの学生でもいるのですけど、彼は実際、車いすで肢体不自由で、四肢不自由なのでスポーツはできません。だけど彼ってすごい分析能力が高いのですね。だから、支える側にはなれるのだけれども、今、障害者の方々って、自分は支えてもらう立場という視点で見られていて、支える側に回るということが非常に難しいらしいのですよね。なので、彼らもスポーツのきっかけということであれば、彼らが支える側に回る場合もあるという視点を１個入れていただけたら良いかなと。すみません、お話もまとめていたのに失礼いたしました。

○松尾会長　いえいえ、ありがとうございました。今、まとめのところのスポーツ文化の新しい枠という中で障害者のある方々が支えていくという視点ってあまり今までなかったよねという、その辺の指摘をいただきました。ありがとうございました。

まだまだいっぱいご示唆いただきたいところでございますけれども、すみません、時間が２分超過してしまいまして、大変時間の管理が悪くて申し訳ございませんでした。

以上で本日の議事を終了させていただきたいと思います。

それでは、進行を事務局にお返ししますので、よろしくお願いいたします。

○稲垣スポーツ総合推進部企画調整担当部長　本日は大変お忙しい中、貴重なご意見を頂戴いたしまして、ありがとうございました。本日いただきましたご意見等を踏まえまして、今後の施策、また、計画の検討に生かしてまいりたいと存じます。

次回の審議会につきましては、また改めて日程のご調整をさせていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

これをもちまして、第28期第３回東京都スポーツ振興審議会を閉会とさせていただきます。本日はお忙しいところ、誠にありがとうございました。

○松尾会長　どうもありがとうございました。オンラインでご参加の委員の皆様、ありがとうございました。

午後４時33分閉会